

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20592627

研究課題名(和文) 離島における順送りの崩壊と新しい相互扶助の構築からみた住民のQOLの検討

研究課題名(英文) Examination of QOL from the perspective of a new mutual aid system and the collapse of traditional relationships between different generations on isolated islands

研究代表者

大西 美智恵 (ONISHI MICHIE)

香川大学・医学部・教授

研究者番号：30223895

研究成果の概要(和文)：

過疎化・高齢化の進んだ離島における新しい相互扶助システム(時間預託ボランティアシステム)の構築は、高齢者のQOLの向上には効果があったが、若い世代にとっては、旧来からの人間関係の煩わしさがネガティブな感情としてあり、効果があったとは言い難かった。今後は、島民のみの世代を超えた相互扶助だけでなく、島外者も組み入れての新しい相互扶助システムのあり方を模索していく必要性が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：

Construction of a new (time-dollar) mutual aid system in isolated islands, affected by depopulation and an aging resident population, increased the QOL of elderly people. However, it is difficult to say whether such a system is effective for people of younger generations, who view traditional human relationships as troublesome matters. This study has shown that cross-generational mutual aid-systems should involve not only inhabitants of isolated islands, but also people from outside of the islands.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	360,000	1,560,000

研究代表者の専門分野：地域看護学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：離島, 相互扶助, QOL

## 1. 研究開始当初の背景

旧S村では「講・組」といった助け合いに代表される相互扶助の習慣が健在である。し

かし今後、高齢化の更なる進行や高齢者単独世帯および高齢者夫婦世帯の急増に伴い、住民相互のサポートが機能しづらくなること

が予想される。また、地方の農村や島嶼部のコミュニティの存続を支えてきた、「自分も歳をとれば若い者の世話になるのだから」「いずれ自分も死んだらこの墓に入るのだから」と言って黙々と地域のために働いてきた「順送り」の意識が、過疎化・高齢化のなかで崩れようとしている。

「楽しく老いる島づくり」推進のためには、離島に住む住民の生活に即した従来からの相互扶助と、それを補完する新しいソーシャルサポートネットワークの構築が必要である。高齢化の進んだ離島での新しい相互扶助システムの構築が住民のQOLに与えた影響を検証する。

## 2. 研究の目的

順送りの崩壊が予測される高齢化の進んだ離島において、旧来からの相互扶助を補完する、島民の生活に即した新しい相互扶助システムの構築が住民のQOLに与えた影響を明らかにする。

## 3. 研究の方法

相互扶助に関する実態調査を、民族看護学の研究手法を用いて行う。S村に通い、

- (1) 旧S村の行事に参加することにより、離島であるS村に暮らす住民の生活様式に触れながら、離島の歴史や文化を理解し、その中で繰り上げられる旧来からの相互扶助と新しく構築した相互扶助（時間預託ボランティア・システム）の実態を明らかにするとともに、時間預託ボランティア・システムの経時的な歩みをまとめる。
- (2) 島民約20名にインタビューを行うことで、島民の価値観や信念を理解するとともに、相互扶助の現状を知り、島民のQOLにどのような影響を与えているかを探る。
- (3) (1)(2)の方法を通して、今後ますます伸展するであろう高齢化のなかで機能する相互扶助の有り様を考える。

## 4. 研究成果

- (1) フィールドワークと既存資料から

### ① 旧S村の概況

旧S村は来島海峡の中央部に位置し3島からなる離島である。地形は3島とも急傾斜地で平坦部が少なく、集落は海岸線の僅かな平地に形成されている。交通はすべて海上交通により行なわれており、航路は市営フェリーと旅客船が3島を経由してI市へ1日6往復している。I市へはフェリーで60分を要する。1998年10月に安芸灘オレンジライ

ンの開通により、旧S村役場のあった島は隣島と橋で結ばれ、さらに2008年11月に安芸灘とびしま海道で本州の広島県呉市と陸続きになった。

旧S村は2005年1月16日I市と合併した。村の人口は、1950年には3,885人であったものが、2002年には901人へと約50年間に1/4に減少した。2005年4月末の人口は752人、高齢化率は52%で、2007年は680人、高齢化率は53.4%であり、2011年2月には588人となった。

産業は、1970年頃までは石灰石採掘などで栄え海運業も盛んであったが、石灰石採掘が中止されてからは、柑橘農業と水産業が基幹産業になっている。

村の保健医療については、各島に国保の僻地診療所が設置されており、医師1名・看護師3名が支所がある島に常駐し、他の2島へは週2回出張診療を行なっている。救急搬送はI市の消防事務組合が救急艇で対応しているが、遠距離のため往復で60分程度を要する。

保健師は長らく1名であったが、1998年から2名体制になった。しかし、合併とともに保健師は配置されていない。高齢者の福祉サービスの拠点として、老人憩いの家や高齢者生活福祉センターがある。高齢者福祉センターではデイサービスや居住事業を行なっているが、施設入所やショートステイサービスを利用する場合には、遠距離の島外施設を利用することになる。大崎下島と陸続きになって、私設のグループホームができたが、利用者の多くは島外の人たちである。

### ② 新しい相互扶助システム

・時間預託ボランティアシステム「タイムダラー」：だんだん

1994年からは新しい支え合いのシステムとして、住民同士で何かを頼むときのお金やお礼の品に変わるツールとして地域通貨（チップ）を導入し、住民同士の新しい助けあいの仕組みを構築してきた。交換チップは年1人20枚で、ボランティア活動30分当たり1枚を目途に交換した。『だんだん』と名付け、活動は少しずつ浸透したが、理念を理解しないで仲よし同士でサービスを交換する人が増えたため、全体を7班に分け、班毎に班長を置き進めてきた。結果として、時間預託ボランティアシステム「タイムダラー」：だんだんは、その考え方が十分に理解されずに、誤った方法で活動した事件を契機に自然消滅の道をたどることになった。

・ふれあいサロン「きないや」

支え合う社会の実現を図ることを目的にした県の「愛と心のネットワークサロン事業」を受けて実施した活動である。住民主体の地域づくりを促進するため、ワークショップを開催しその成果として、2004年5月にふれあいサロン『きないや』を作り、運営している。ふれあいサロンは、地域の中で仲間づくりや異世代交流を行い、人と人が結ぶふれあいの場として、地域の住民が運営するものである。旧S村では、子供たちが放課後や休日に友達と利用したり、季節の行事を異世代で楽しんだりしている。

グループ援助活動 (ふれあいサロンきないや)H16～

・いきいきサロン活動

ボランティアと小学生から高齢者等が協働して企画し、内容を決め、運営していく楽しい仲間づくりの活動。



(2) 島民へのインタビューから

① インタビュー対象者

対象者は、60歳前半から80歳前半の高齢者8名と、30歳後半から50歳前半の小中学生を持つ母親6名である。なお、高齢者は対象者を2グループに分けてグループインタビューを行い、母親たちは個別にインタビューした。それぞれのインタビュー時間は90分から120分であった。

② 高齢者へのインタビュー結果

高齢者にとって島の相互扶助は、世界が狭く、人間関係の煩わしさがあっても、島全体がファミリーとして、助け合って生きてきた経験の中で、島が好きというポジティブな感情を持っていた。しかし、急激な人口減少や高齢化の中で、将来への不安を抱きながら取り組んだ新しい相互扶助の『だんだん』も、旧来からの島独自の相互扶助のなかで、十分な理解が得られず自然消滅した。ただ、『だんだん』の年齢・性別・地区の区別なく島民全体で組織する形や考え方の芽は息づき、『きないや』に引き継がれていた。

③ 母親達へのインタビュー結果

母親達の世代は、高齢者との世代間を超えた相互扶助について考え活動していくことの優先順位は低かった。合併後、急激に若い

世代の数は減り、母親達も「ずっと島で暮らそうとは思わない」と語った。

高齢化・過疎化の進む島といえば、高齢者の問題として捉えがちであるが、実は若い世代の疲弊が根底にあることが明らかになった。

新しい相互扶助システムの構築は、高齢者のQOLの向上には効果があったが、若い世代にとっては、旧来からの人間関係の煩わしさがネガティブな感情としてあり、効果があったとは言い難いという結果であった。ただ、島が大学生の福祉実習を受け入れていることは世代を超えて歓迎していた。

(3) まとめ

島という隔離された狭小な世界で生活してきた島民が、自由の国アメリカで発祥したタイムダラーをどのように理解し活用するのか、そしてそれが島民のQOLにどのように影響するのを見てきた。『だんだん』と名付け、旧S村独自の方法も取り入れたが、結果として考え方が十分に理解されずに、誤った方法で活動した事件を契機に自然消滅の道をたどることになった。地域特性を反映する互助重視の必要性<sup>1)</sup>は訴え続けられていることでもある。しかし、『だんだん』の精神はサロン『きないや』の設立に引き継がれ、子どもたちの集いの場になっている。『きないや』についてはよけいな干渉をされることなく、島民からの運営資金への協力も得られている。大人が『きないや』を利用するのではなく、子どもたちが利用することも、協力を得ることができた背景であると考えられる。一方高齢者や母親世代の利用が進んでいない。Alameda郡の研究<sup>2)</sup>においても、社会的孤立は高い死亡率の予測因子であることが明らかにされた。日本においても、岡戸ら<sup>3)</sup>が社会活動が高齢者の生命予後を規定する要因であることを報告している。今後は高齢者や母親世代の集いの場として活用されるための戦略が必要である。また、行政頼みだった島民気質を変容させ、島で高齢者を看取るまでに住民力をつけることができるか、またつけるために、世代間を超え協力できるのか、また、NPOの設立や、島内のみを越えた相互扶助だけでなく、島外からの応援団も組み入れての新しい相互扶助システムの在り方も模索していく必要がある。より一層の相互扶助の実証的研究の必要性<sup>4)</sup>を思う。

文献

1) 大湾明美他：沖縄県友人離島の類型化と高齢者の地域ケアシステム構築の方向性、沖縄県立看護大学紀要、6、40-49、2005。

2) Berkman LF, Syme SL: Social networks,

host resistance, and mortality: A nine-year follow-up study of Alameda County residents, American Journal of Epidemiology, 109(2), 186-204, 1979

- 3) 岡戸順一・星旦二：社会的ネットワークが高齢者の生命予後に及ぼす影響，厚生指標，49(10)，19-23，2002.
- 4) 玉野和志・前田大作・野口裕二・中谷陽明・坂田周一・Jersey Liang：日本の高齢者の社会的ネットワークについて，社会老年学 30，27-36.

5. 主な発表論文等  
なし。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大西美智恵 (ONISHI MICHIE)  
香川大学・医学部・教授  
研究者番号：30223895

(2) 研究分担者

越田美穂子 (KOSHIDA MIHOKO)  
香川大学・医学部・准教授  
研究者番号：30346639

片山陽子 (KATAYAMA YOUKO)  
香川大学・医学部・助教  
研究者番号：30403778